

データに基づくさまざまな政策提言、SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）による情報発信、女性目線の現場環境改善、廃校を利用した職業訓練校の開設、さらにはゆるキャラの制作など、次から次へと新たな試みを具現化さ

せてきた群馬県建設業協会。その中で、自ら考え行動し、自らの言葉で世間に発信し続ける青柳剛会長は、トップ就任から早10年の節目を迎えた。その10年を振り返るとともに、「令和」として幕が開けた新時代への思いを聞いた。

率先行動10年、「振り返りつつ前へ」

各県協会の活動が大きな流れを生む



「建設業の役割は何なのか。地域の建設会社がなくなっていいのか」。公共事業費の削減やタンピング（過度な安値受注）の横行などのあおりを受け、県内名門ゼネコンが連鎖破たんするなど厳しい状況だった10年余り前、まだ副会長・沼田支部長の職にあった青柳氏は「第一の役割は災害対応だ」と考えた。

スマートフォンなども普及していない2008年当時、沼田発の試みとして「GPS（全地球測位システム）携帯による災害情報共有システム」を構築し、多くのマ



スコミからも注目を集めた。現在広く活用されている『べんけん』の元祖

群馬県建設業協会 青柳 剛 会長

だ。09年5月「さあ、やるぞ」と意気込んで会長に就任。しかし、出鼻をくじかれるように、その3ヵ月後には民主党政権が誕生し、ハッ場ガムの中止が宣言された。経営環境がさらに厳しくなる懸念以上に、突然の大事業中断に「ものをつくる人、地域を守る人の心が壊れる」と強い危機感を抱いた。

その思いが、除雪体制崩壊の警鐘を鳴らす提言へとつながった。いまや、地方建設業の代名詞として定着した「地域の守り手」という表現を誕生させるきっかけの一つとも言える。11年3月の東日本大震災、12年12月の自民党による政権奪還などを経て、風向きは変わり始めた。そのころ協会は「民主党政権時代のマイナスを押しとどめる活動から、前向きな広報戦略へとパラダイムシフトした」。

女性・若者・IT・環境を基軸にした活動で「変わり始めた建設業」を積極的に発信。次のステップとして現在、「入ってみたい建設業から入ってよかった建設業へ」をつたい、人材確保・育成と生産性向上のための取り組みを推進。全国に先駆けて、ICT土工研修やリカレント（学び直し）研修などを実施している。今後についても「人を育て、人が育つ建設業協会にしたい。長く続けることが大切で、とにかく最新技術の習得や技術者のスキルアップにつながる研修を一生懸命やってみよう」と意気込む。建築を学んでいた経験から「表現」へのこだわりは強く、「これからの地域建設業には『おしゃれ』など、デザインの見点やマーケティングの考えも求められてくるだろう」と展望する。

この先を見据え、「建設業はこつこつとものを築き上げていく仕事であり、過去から学ぶことは多い。だが決して昔には戻らない覚悟が必要だ。振り返りつつも、着々と前に進んでいく姿勢を大切にしたい」と青柳会長。次はどんな新風を業界に吹き込むのか。引き続き、その手腕に注目が集まる。